

## 【低体温症による救急統計について】

寒さが本格化することで、今後ますます低体温症リスクが高まることが予想されます。

低体温症は、何らかの原因により身体が冷えたために体温が低下し、正常な身体の機能が保てず様々な症状が起こる状態を言います。

特に気温などの環境要因によって発症することが多いことから、事前の対策と行動によってある程度の予防が可能です。

過去10年間（2010年から2019年まで）に郡山地方広域消防組合管内で、334人が低体温症により救急搬送されました。

低体温症により救急搬送された方の8割以上は「高齢者（65歳以上）」であり、また発症すると重症化する可能性が高いことから注意が必要です。

詳細を下記のとおりまとめましたので公表します。

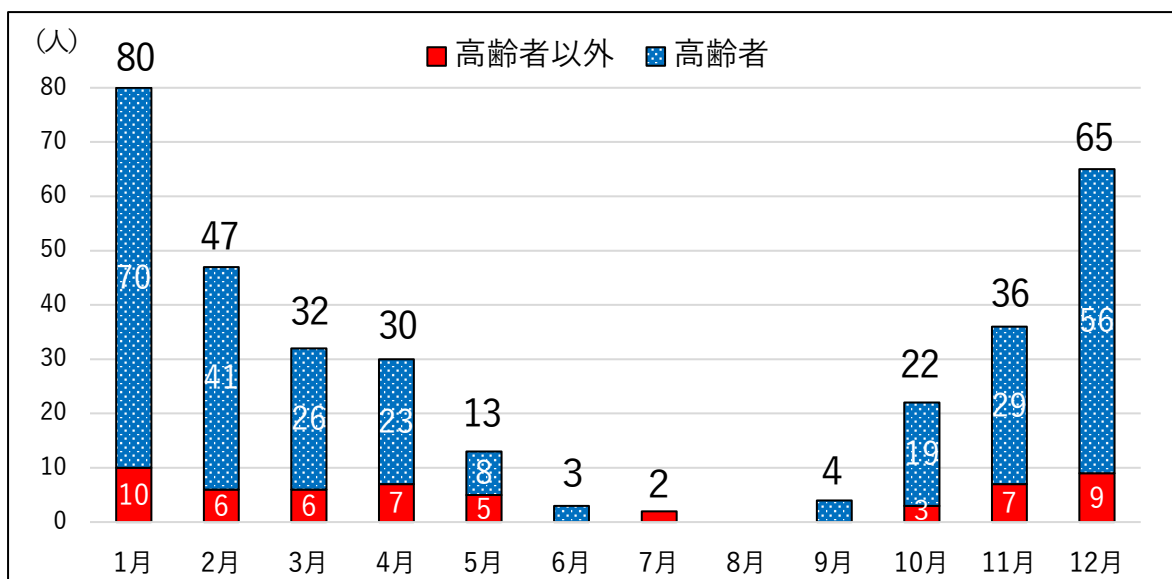
※ 小数点を含むものは、小数第二位を四捨五入した数値

### 1 月別の救急搬送人員（2010年から2019年まで）

過去10年間の低体温症による救急搬送人員を月別にみると、1月が80人（24.0%）で最も多く、1年間の約4分の1を占めています。

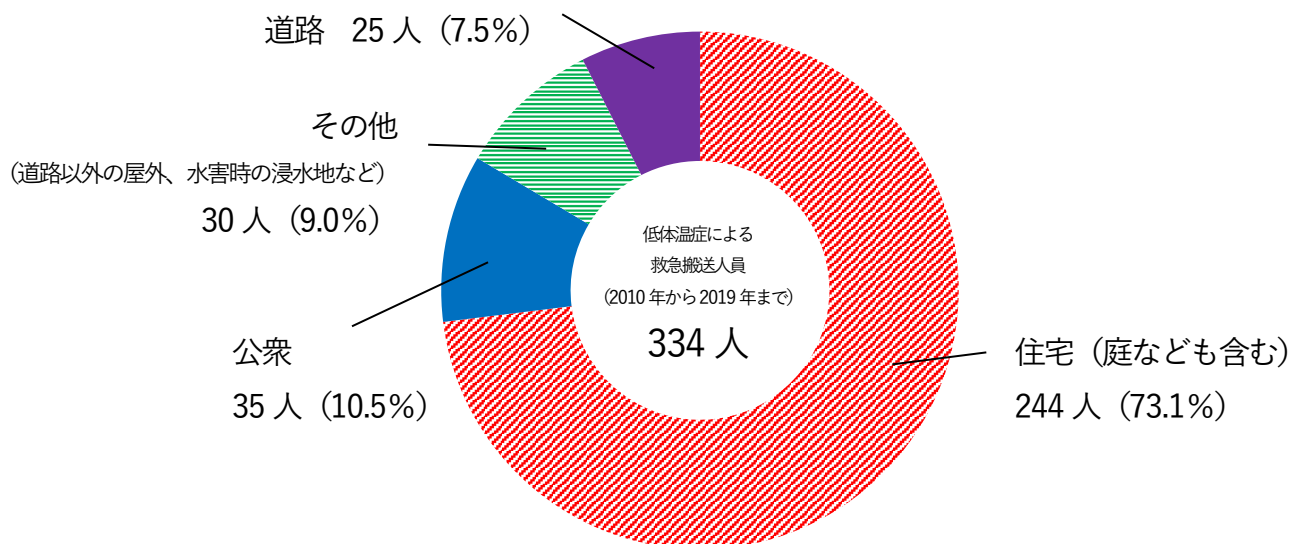
次いで12月が65人（19.5%）、2月が47人（14.1%）と続き、上位3カ月で1年間の6割近くを占めており、気温が低い環境要因に寄与していることが分かります。

また、救急搬送人員を「高齢者」と「高齢者以外」に分類すると、搬送人員が少ない夏を除き「高齢者」が圧倒的に多く、総数で比較すると「高齢者」が83.5%を占めています。



## 2 救急要請場所別の救急搬送人員と割合（2010年から2019年まで）

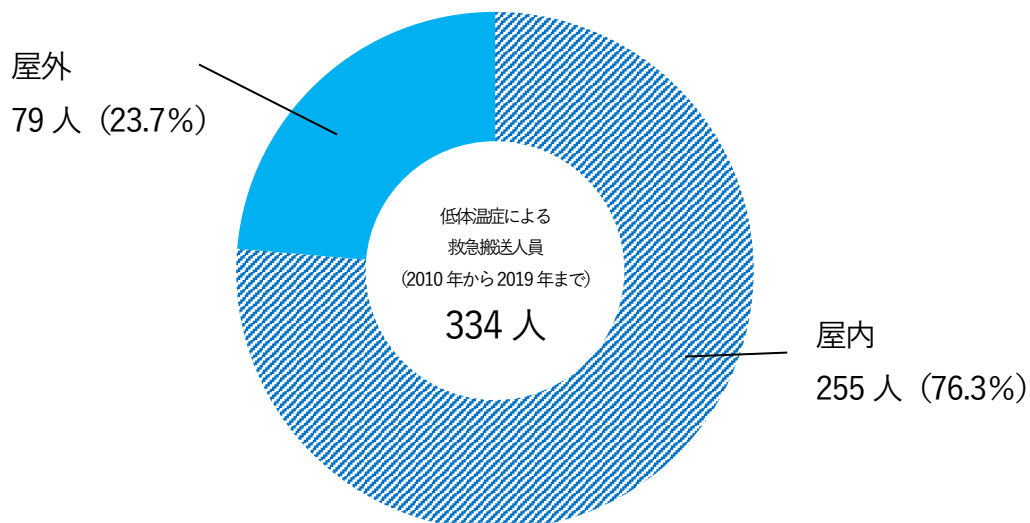
過去10年間の低体温症による救急搬送人員を救急要請場所別にみると、「住宅（庭などを含む）」が最も多く244人（73.1%）、次いで「公衆」が35人（10.5%）、「その他」が30人（9.0%）、「道路」が25人（7.5%）と続きます。



## 3 救急要請場所の屋内外別救急搬送人員と割合（2010年から2019年まで）

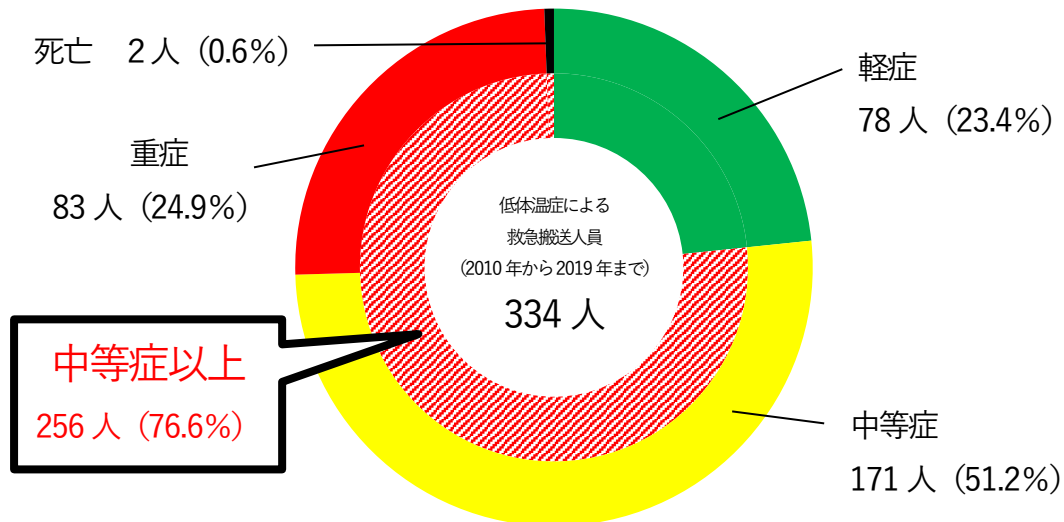
過去10年間の低体温症による救急搬送人員を救急要請場所の屋内外別でみると、「屋内」が255人（76.3%）、「屋外」が79人（23.7%）となります。

気温が低い環境であれば、屋内外に関係なく低体温症を発症する可能性があることが分かります。



#### 4 傷病程度別の搬送人員と割合（2010年から2019年まで）

過去10年間の低体温症による救急搬送人員を傷病程度別にみると、「中等症」が最も多く171人（51.2%）、次いで「重症」が83人（24.9%）、「軽症」が78人（23.4%）と続き、「中等症」以上の傷病程度で76.6%を占めていることが分かります。



#### 5 過去の事例

屋内であっても、気温の低い日に十分な温かさのない部屋で寝ていたり、長時間身体を動かさないと体温が保てなくなり、低体温症になることがあります。

《低体温症となり救急搬送された事例》

- ◇ 訪問介護職員が80代男性宅を訪れたところ、居間で意識レベルが低下した男性を発見し救急要請となった事例。（1月）
- ◇ 70代の女性が屋外を歩行中、凍結路面で転倒し自力で動けなくなり時間が経過、通りがかりの住民が発見し救急要請となった事例。（12月）
- ◇ 60代の女性が自宅の雪かきをしていたところ、意識が朦朧とし急な震えを呈したため救急要請となった事例。（2月）
- ◇ 60代の男性が自家用車内でエンジン停止の状態では仮眠をとっていたところ意識レベルが低下、通りがかりの住民により救急要請となった事例。（3月）
- ◇ 50代の男性が居酒屋で飲酒后、徒歩で帰宅途中で泥酔し路上で眠り込んでいたところ、通りがかりの住民が発見し救急要請となった事例。（1月）
- ◇ 40代の男性が湖上（ボート）で釣りをしていたところ、ボートが転覆し救助要請となった事例。（11月）

## 6 予防法と対策

低体温症は、寒さなどによって体温が低下することで発症する場合があります。

特に冬の季節は、室内を暖かく保つとともに、外出時は暖かい格好で出かけましょう。

屋内外に限らず運動や作業をして汗をかいた後は、すみやかに着替えをするなどして体温の低下を防ぎましょう。

飲酒時は寒さに鈍感となり、気温が低い環境でそのまま眠り込んでしまうことで、低体温症となってしまう危険があるので、十分に注意しましょう。

万が一、低体温症が疑われる症状が出たら（症状の人を発見したら）、まずは暖かい場所に移り（移し）、（濡れている場合は、衣服を脱がせ）乾いた毛布や衣服で覆い保温してください。

意識障害がある場合等は、すみやかに 119 番通報をお願いします。